『モダン・タイムス』におけるチャーリーの「退場」をめぐる一考察

五十嵐　由香*

はじめに

チャールズ・チャップリン（Charles Chaplin, 1889－1977）が演じる放浪者（a tramp）チャーリーは『モダン・タイムス』（*Modern Times*, 1936）[1] の中でうたを歌って初めてその声を披露した。そのラストシーンでは、ポーレット・ゴダード（Paulette Goddard, 1910－90）が演じるもう一人の放浪娘（a gamine）と腕を組んで一本道を去って行く（画像１）。これを最後に放浪者チャーリーはその後のチャップリン映画に登場しなくなる。

＊画像１『モダン・タイムス』最後の場面
Modern Times © Roy Export S.A.S.

＊画像２　機械に巻き込まれたチャーリー
Modern Times © Roy Export S.A.S.

『モダン・タイムス』は（一部音声入りのサウンド映画であるが）チャップリンが製作した最後のサイレント映画である。チャップリン映画はこの後作風が変わる。『独裁者』（*The Great Dictator*, 1940）以降の作品はトーキー映画となり、チャップリンが演じる人物には個々に名前が付く。チャーリーが『モダン・タイムス』を最後にチャップリン映画から消えてしまうことと、そして、表題

＊　人間科学総合研究所客員研究員

（Modern Times）が「現代」を意味するこの映画が製作された背景には、1930年代初頭の世界情勢がある。映画は社会問題を扱い製作者の政治的な立場を反映すべきものであるという、当時の映画批評による圧力が深く関わっていると考えられる。

本稿では、1930年代初頭の世界情勢とチャップリン映画に向られた政治的映画批評家の眼差しがチャップリンに与えた影響として、『モダン・タイムス』において、チャーリーがチャップリン映画から退場していく理由を探る。

1．映画製作者チャップリンを取り巻く1930年代初頭の状況

チャップリンは『自伝』[2]の中で、前作の『街の灯』（*City Lights*, 1931）に対してなされた批評に意気消沈していたことを次のように明かしている。「ある若い批評家の『街の灯』評がわたしにはこたえた。良い作品だが、一歩誤ればセンチメンタリズムになる。今後のチャップリンはリアリズムを身につける必要がある、と言うのだった。事実私は同感だった。」（447）

Charles J. Malandは『チャップリンとアメリカの文化』（*Chaplin and American Culture*, 1989）の中で、この「ある若い批評家」とはHarry Alan Potamkin（1900－33）かLorenzo Turrent Rozas（1903－41）であろうと推測している（139）。[3] Malandの説明を要約すると、Potamkinは“Film Cults”（1932）[4]というエッセイの中で『街の灯』を「感傷的なペーソスが漂いすぎており、（社会批判をするという意味においては）冒頭のシーンがこの映画のピークである。貧富の差が際立つ百万長者と放浪者の関係が、盲目少女と放浪者のロマンチックな関係の、副次的なマイナーモチーフになってしまっている。社会風刺という意味において『キッド』（*The Kid*, 1920）のずっと下のレベルに落ちてしまった。社会関心事を見せるべき責任を捨ててロマンスやペーソスにフォーカスを当てた。」（138）と批判している。一方、Rozasは、チャップリンがアメリカ資本主義の急成長の中で成功していることを理由に、チャップリンを「資本主義者の仲間」（139）と捉えている。[5] 彼らのような批評家たちは、その時代の問題と政治的に関連付けた映画を、また社会の混乱期に貢献しているという姿勢を示すような映画を製作するように、チャップリンをはじめとするハリウッドの映画製作者たちに圧力をかけてきた。

しかしながら、前述のチャップリンの『自伝』には「リアリズム」への懐疑的な言葉が続いている。「いわゆるリアリズムというものには、しばしばただのつくりもの、まがいもの、しかも散文的で退屈なものが多い。映画で重要なのは、ただ単なるリアリティということではなく、人間の想像力がそのリアリティをどうするかという問題にあるのだ」（447）。チャップリンは1930年頃の「リアリティ」をどう感じ取っていたのだろうか。1929年の大恐慌が産業や経済に与えた大きな打撃は1933年頃まで続き、失業者や貧困にあえぐ人々の数は増加していった。『街の灯』は1927年から31年にかけて撮影され、「左派系」批評家の批判を受けたのだ。チャップリンは1931年に『街の灯』が公開されるとすぐに、映画のプロモーションを兼ねて一年五ヶ月に及ぶ世界一周旅行に出かけた。その旅行記を『世界漫遊記（A Comedian Sees the World）』という題名で雑誌『女性の家庭の友』（*Woman's*

Home Companion）に、1933 年 9 月から 34 年 1 月まで五回にわたり掲載した。[6] この頃の世界状況を自分の目で見て記録しているのだ。

この旅行の中で政治家、貴族たち（大英帝国の首相 Ramsay MacDonald, Winston Churchill, ベルギー国王 King Albert など）、芸術家（Bernard Shaw, H.G.Wells など）、また時の人であった Mahatma Gandhi や Albert Einstein など多数の人物に会い、その体験や彼らに対する率直な印象を記録している。同時に世界中の記者たちがいつもチャップリンを取り巻き、彼の一挙手一投足を記事にする。特に政治家たちとの会合の後は、どのような話をし、どういう感想を持ったのかインタビューされ、彼の発言は翌日の新聞に掲載される。このことが、チャップリンは政治や経済に意見する人物であるような印象を与えてしまっている。「共産主義者」や「アナーキスト」といった、チャップリン自身の政治的主義や思想を無視したレッテルが貼られていく。チャップリンは、製作した映画の人気が上がるにつれて、自分の発した言葉に対して世界が注目し重要度が増していったと述べている（『世界漫遊記』114）。また、実際のところは記者たちに辟易し、彼らの質問をはぐらかすため「イエス、ノーと答えて最後は笑顔でやり過ごす」術を身に着けたことを語っている（同 42）。つまり、メディアによってつくられたチャップリンのイメージと、彼自身の思想は必ずしも合致しているとは言えない。

チャップリン自身は、映画が政治的思想を反映する媒体であるとは考えていない。バーナード・ショーが「芸術は全てプロパガンダであるべきだ。」と言ったことに対して次のような不快感を示している：「私にとってそんな前提は芸術を制限してしまう。むしろこんなふうに考えたい。芸術の目的は――もし目的があるとしたらだが――感情、色彩、音を増強させることだ。芸術家はそうすることで道徳的な解釈を物ともせずにより豊かに生を表現することができるのだ」（『世界漫遊記』36）。政治家たちとの邂逅について彼自身の残した記録には、ウエストミンスター候と乗馬を楽しんだこと（同 79）やベルギー国王に会った時のこと（同 72）など後の映画の笑いのモチーフになるような記述が多く見られる。[7]

チャップリンがこの旅行の中で感じた世界の「リアリティ」とは、第一に大恐慌後の失業、貧困の増大であり、この問題は幼少期から映画界に入るまで彼自身が体験したものを思い出させるものであった。一方で「チャーリー」というキャラクターが世界中で人気を博し、チャップリン自身が著名人となったおかげで、世界の政治家、貴族といった上流階級の人々や芸術家、知識人と会う機会を得て、目にした世界がある。つまり、貧困にあえぐ人々の生活から、政治や世の中の思想を動かすような人物まで、様々な人間の姿を目の当たりにしたのである。チャップリンの映画の中で権力者が滑稽に見えたり、貧困の辛さをリアルに感じ取ることができたりするのはそのためであろう。

1930 年代初頭、著名人となったチャップリンが何を発言するかということに注目が集まり、彼のイメージが一人歩きし始めていた。批評家から映画にその時代の問題を描く「リアリズム」を表現するよう求められるなか、チャップリンは、世界の情勢を自分自身で体感しその「リアリティ」を投射する作品として、『モダン・タイムス』を製作することになる。

2．最後のサイレント映画『モダン・タイムス』

チャップリンの『自伝』によると、この映画のプロットを思いついたとき、サイレント映画をつくること、二人の放浪者を登場させること、そして工場のベルトコンベアで神経衰弱になることを決めたようだ。[8] また、テーマは「得体の分からぬ妙な人間二人が、なんとか現代（モダンタイムズ）に生きようという懸命の努力にしぼられる。次々と彼らは不況、ストライキ、暴動、失業等々にまきこまれる。」（448）とある。「現代」を象徴する「不況、ストライキ、暴動、失業等々」を背景に、二人の放浪者は生きるために活動し、チャーリーはそれまでの映画と同様に観客の笑いの的となる。一つのシークエンス（一つの挿話を構成する一連の画面）に一つ以上の笑いが起きるように滑稽な場面が現れ、そのようなシークエンスの連続でこの映画は作られている。チャップリンの短編映画ではおなじみの警官と絡むドタバタの場面も多く、四度もパトカーに乗せられてしまう。シークエンスごとに筋を追うと、次のようにそれぞれに笑いを誘う場面が現れる。

1）チャーリーは工場労働者（a factory worker）という設定である。鋼製品工場の生産ライン五番で、ベルトコンベアで流れてくる部品のナットを、両手に持った大きなスパナで締めるのが彼の仕事である。チャーリーの後ろには、あと二人ナットを叩く作業員がいて、その後部品は大きな歯車の中へと送られていく。チャーリーが遅れをとると後ろの大男から蹴られてドタバタが繰り広げられる。

2）一方、社長は、工場中を見渡して命令を下せる大きなモニターのついた社長室でパズルをしたり新聞を読んだりしている。チャーリーがトイレで一服しようとタバコに火をつけると、トイレの壁の巨大なモニターに社長が映し出され、「おい怠けるな　仕事だ　行け！」と怒鳴られる。社長室にセールスマンがやってくる。彼らは口頭では説明せずレコードをかけて商品案内を聞かせる。労働者が仕事の手を止めずに昼食を食べられる自動飲食機械だそうだ。昼休みになった労働者たちのところに社長とセールスマンが来て、チャーリーをこの機械の実験台に選ぶ。機械に縛り付けられたチャーリーは機械からスープを飲まされ、黒板消しのような形のナプキンで口を拭われ、自動で回るコーンを食べさせられたりする。突然機械が暴走し、チャーリーは回転するコーンで顔をえぐられ、スープを顔に浴び、しまいにはケーキが飛んできて、顔をナプキンで叩かれてノックアウトされてしまう。セールスマンたちは彼の悲惨な状況には御構い無しで、機械を直そうと必死である。

3）午後遅くになり、社長は生産ラインのスピードを上げて「全力を出せ」と命令する。チャーリーは一心不乱にスパナを回して、部品とともに大きな歯車の中へと巻き込まれてしまう（画像2）。仲間の作業員が機械を止めて、歯車を逆回転しチャーリーを助け出す。彼は正気を失ってスパナで仲間の鼻をねじ回し、女性の服についている六角形のボタンを回そうと追いかける。さらに油差しを持って作業している人たちに油を駆け回り、ついには病院の車に乗せられて連れて行かれる。

4）医者から「無理をしないで、刺激をさけて」とアドバイスをもらいチャーリーは退院する。ストライキのために工場は閉鎖され、仕事を探すが見つからない。通りを走るトラックの荷台から、注意を促す赤旗がチャーリーの目の前に落ち、彼はその旗を拾い、振りながら落としたことを知らせようとトラックを追う。そこへ道の角から「自由・団結」を掲げたデモ隊が回ってくる。正面から見る

と、チャーリーが赤旗を振りデモ隊がその後に続いているように見える。警官たちが画面手前から現れ、デモ隊を取りしまろうと囲い込む。マンホールから這い出たチャーリーを共産党のリーダーと勘違いをして、罪のないチャーリーをパトカーに乗せて連れていってしまう。

5）浮浪娘（a gamine）が港の小船からバナナを盗んで子供たちに分けている。彼女に母はなく父は失業中で二人の妹がいて食べる物に困っている。

6）警官に捕まり収監されたチャーリーは食堂で食事をするところである。チャーリーの隣に座っている囚人は警官からコカインを所持しているという疑いをかけられる。この囚人はコカインをテーブルの上の塩の瓶に移し替え、証拠隠滅を図ってから警官に連れて行かれる。チャーリーは気づかずにコカイン入りの塩を食べ物に振りかける。コカインの影響で人が変わったチャーリーは、独房に戻り損ねて看守を探しにいく。独房の前では脱獄を図ろうとする囚人と看守との間でもみ合いが起こる。ちょうど戻ってきたチャーリーは、妙な力を発揮して脱獄囚を次々と倒し看守を助ける。

7）チャーリーの勇敢な行いが認められ、新聞を読んだり看守と談笑できるような居心地の良い独房に移される。恩赦によって出獄が許されたと連絡が入る。そこに牧師夫妻が訪ねて来る。牧師夫人とチャーリーが部屋に二人で残され、気まずい空気の中お茶をいただく。夫人がお茶を飲むと胃を通るキュルキュルという音が聞こえてくる。夫人の連れている犬がそれを聞いて吠える。次にチャーリーがお茶を飲むと同じ音がして今度はチャーリーに吠える。彼が音をごまかそうとラジオをつけると、ラジオから「胃の悪い方はお忘れなく」という薬の宣伝が聞こえてくる。慌ててチャーリーはラジオを消す。夫人が薬を飲もうとスプレー型の水差しでコップに水を注ぐと大きな音がして、チャーリーはびっくりして飛び上がる。

8）チャーリーは警察署から仕事に就くための推薦状をもらい、造船所で働くことになる。親方からV字型のくさびを探して来いと言われ、作りかけの船を止めているくさびを外して、その船を海の中へと進水させてしまう。チャーリーは自分には仕事は向かないと思い、監獄に戻ることを決意する。

9）一方浮浪娘は、父がデモに巻き込まれて亡くなり、妹たちと孤児院に送られることになるが、彼女だけ隙を見て逃げ出していた。飢えた彼女は街でパンを盗み、逃げるところをチャーリーとぶつかって転ぶ。パン泥棒と聞いたチャーリーは自分がやったと警官に言うが、目撃者の証言から、娘は逮捕されてしまう。どうしても監獄に戻りたいチャーリーは、わざと無銭飲食をして捕まる。警官はチャーリーの手を掴んだまま、通りにある電話でパトカーを呼んでいる。視点が変わり、繋がれたまま待っているチャーリーの前にはタバコ屋があり、店主がご用を聞く。チャーリーは葉巻を指差し、火をつけてもらって一服する。通りがかりの子供たちにも、店のお菓子を渡してあげる。店主が「お代は？」というとき警官が横から現れると、チャーリーは警官を指差し、払ってと促す意味のポーズをする。そこへパトカーが来てチャーリーは連れて行かれる。

10）パトカーの中でチャーリーと浮浪娘は再会する。逃げようとした浮浪娘と警官がもみ合いになり、パトカーが角を回った拍子に外に放り出され、二人は逃亡する。近くの家から出てきた幸せそう

なカップルを見て、二人も家を持つ想像をする。チャーリーは家を持つために働く意欲が芽生え、たまたま欠員になったデパートの夜警の仕事にありつく。

11）デパートの閉店後、チャーリーは浮浪娘をデパートに招き入れ、サンドイッチやケーキを食べさせる。おもちゃ売り場でスケートを楽しんだ後、寝具売り場のベッドに彼女を休ませてまた夜警の仕事に戻る。そこへ強盗が押し入る。酒売り場で格闘した後、実はその強盗が工場で勤めていた時の同僚だとわかる。彼らから、強盗ではなく食べるものが欲しいだけだと言われ一緒に酒を飲んで寝てしまう。翌朝デパートが開店し、客が服売り場で寝ていたチャーリーを見つけ、また警官に捕まる。

12）出所したチャーリーは浮浪娘が見つけた粗末な小屋で一緒に生活を始める。新聞に工場再開の記事を見つけ、チャーリーはすぐに工場に駆けつける。機械工の助手になったチャーリーは、親方の懐中時計を圧縮機で潰したり、親方を機械の歯車に巻き込ませたりして相変わらずの無能ぶりを発揮する。そこへストライキの知らせが入り、また工場は閉鎖になってしまう。

13）外では工場を出た人々と警官が一触即発の状態である。チャーリーは警官から早く帰るように促される。偶然、チャーリーが踏んだ板の端に載っていたレンガが吹き飛び、遠くにいる警官の頭に当たってしまう。暴徒の一人と勘違いされたチャーリーは、また警官に捕まる。

14）一方浮浪娘はカフェの外で流しの楽士に合わせてダンスを踊っていた。それがカフェのオーナーの目にとまり、娘は踊り子として雇われることになる。それから一週間が経ち、綺麗な身なりをした娘が留置所から出てきたチャーリーを待っている。彼女はチャーリーにそれまでの事情を話し、カフェに連れて行き、彼も仕事がもらえるようにオーナーにお願いする。

15）チャーリーは仮雇いのウエイターになる。厨房と客席のフロアを行き来するために、入口と出口の二つの扉がある。チャーリーはこの二つの扉を逆に出入りするために、他のウエイターとぶつかり騒動になる。また、アヒルの丸焼きを客席まで届けようとするが、ダンスタイムになったフロアで客の踊りの渦に巻き込まれてしまい、なかなか客のテーブルまでたどり着けない。しまいにはフロアのシャンデリアの突起にアヒルを刺してしまう。やっとのことで客のテーブルにアヒルを運び、皿に切り分けるためアヒルにナイフを入れようとする。その時フロアではラグビーのコントが始まる。切ろうとしたアヒルの丸焼きは滑って皿からコントの演者に飛んで行く。追いかけるチャーリーも混ざって、アヒルをボールにしたラグビーのショーになってしまう。オーナーは、ウエイターとして失敗ばかりするチャーリーに、歌は大丈夫だろうなと脅しをかける。

16）歌詞が覚えられないというチャーリーのために、娘は歌詞をカフスに書いてあげる。カフスを見ながらチャーリーは歌の練習をする。チャーリーの歌の番になり、ダンスが始まる。勢いよく腕を横に広げた拍子にカンペのカフスが飛んでいってしまう。歌おうとしてカフスがないことに気づいたチャーリーは、カフスを探すが見つからず、歌えないと娘に身振りで伝える。彼女は歌詞はデタラメで良いと返し、チャーリーはイタリア語、フランス語、スペイン語とも聞こえるような言語と素晴らしいパントマイムで「Titine」（ティティナ）を歌い上げる。客は拍手喝采し、オーナーがチャーリーを雇うと約束してくれる。

17）次に娘のダンスの番というとき、客席に隠れていた警官が彼女を捕まえ、浮浪罪で指名手配中だとオーナーにカードを見せる。チャーリーと娘は隙を見て警官から逃げる。夜が明け、誰もいない一本道にいる二人。「〔娘：〕いくら努力してもムダだわ／〔チャーリー：〕ヘコたれないで元気を出すんだ　運は開ける」と字幕が入り歩き出す。険しい顔をしている彼女に、チャーリーはスマイルとジェスチャーして、手に手を取って微笑みながら二人で一本道を歩き続ける（画像１）。

以上のようにシークエンスで分けてこの映画を見ていくと、全体のプロットは単純で、チャーリーが笑いを巻き起こすシークエンスが積み重なるようにして一つの映画を作っている。６）、７）、15）のシークエンスなどは滑稽な場面が次々と現れ、それだけで短編映画に匹敵するようなものもある。チャーリーが登場するシークエンスで生じる笑いは、大きく三つのパターンに分けることができる。一つ目はチャップリンがそれまで製作したサイレント映画と同様に、生きるために必死に努力するが目の前の状況に適応できないということから生じる滑稽さであり、１）、２）、３）、６）、８）、11）、12）、15）のシークエンスに見られる。二つ目は警官の視点と観客が見ている視点の違いによって生じる笑いであり、４）、９）、13）のシークエンスで見られる。この赤旗を掲げたり、警官に石を投げたりする場面からチャップリンを「共産主義者」であると批評した人たちもいた。[9]

しかし、チャーリーは良心から旗を拾い、たまたま踏んだ板に石が乗っていただけである。この場面のユーモアを第一に感じるのではなく、ここに製作者の政治的主張を読み込もうとするのは、まさに「モダンタイムズ」という言葉が示す1930年代初頭という時代の特徴を表している。主義や主張をもって映画を見ればこの映画は「左寄り」だ「右寄り」だという議論が生まれ、時代や背景によっても見る人の視点は変わる。

もう一つ笑いを引き出す要素に音の使い方がある。１）、２）、７）、14）そして極めつけは16）のシークエンスである。この映画は基本的にサイレント映画ではあるが、音楽や効果音、部分的に人や犬の音声を入れることにより、トーキー映画には表現できないような面白い場面がある。人物の肉声としては社長の「第５班スピードを上げろ」のような命令、セールスマンの持ってきたレコードの声、ラジオの声、チャーリーの歌声のみである。歌以外は機械を通して聞こえる無機質な音として描かれている。また浮浪娘がカフェのオーナーにチャーリーを雇ってくれるように頼む場面では、三人の声色を表すために、楽器を使い分けテンポを変えることで、それぞれの声の違いや感情を表現している。そして音の使い方の醍醐味という点では、チャーリーが歌う「ティティナ」が傑作である。意味不明の歌詞と卓越したパントマイム、バンドの曲がそれに添うように流れ、チャーリーの声を初めて聞く感動とパントマイムによる表現の豊かさを堪能できる場面である。

ここで重要なのは、チャーリーが最後に〈声〉を持ったが〈言葉〉は持たなかったということである。製作者であるチャップリン自身が演じる人物が言葉を持つということは、言葉がチャップリン自身の思想と解釈されてしまう危険性をはらむ。チャップリンはそれを恐れていたのではないだろうか。この時代、一個人としてのチャップリンが自分の発する言葉に記者や批評家や要人たちが耳を傾け、取り沙汰されることに不自由を感じていたと思われる。言葉を発することによってコミカルなキ

ャラクターであるチャーリーまでもが自由を失い、彼が登場する過去の映画までもが政治的に解釈されてしまう可能性もある。「放浪者」という自由で、ある意味社会からは離れたところに存在するこの普遍的なキャラクターをいわれのない偏った批判から守るために、チャップリンはチャーリーに言葉を語らせなかったのではないだろうか。次の作品『独裁者』でチャップリンは初めて完全なトーキー映画を作るが、a tramp というキャラクターは登場しなくなる。

3．結び

チャップリンが『モダン・タイムス』の中で笑いを生じさせるのは、スクリーンの中で一生懸命に努力するが、周りが見えていない人物の姿である。観客は全てをスクリーンの外から見て把握するため状況が理解できるが、映画の中の人物たちには見えていない。この視点の違いが笑いどころとなるのである。チャップリンは『自伝』の中で、ドラマと比較して映画におけるユーモアについて次のように記述している。

> つまり、それは、一見正常に見える行為の中に見出される極めて微妙なずれである。別の言葉で言えば、われわれはユーモアを通して、一見合理的なものの中に非合理を見、重要に見えるものの中に取るに足らぬものを見てとる。ユーモアはまた人間の生存意識を高め、健全な精神をささえる。ユーモアがあればこそ、人生の有為転変も比較的軽く乗り切れるのだ。それはわれわれに均衡感覚を与え、オーバーな厳粛さの底にひそむこっけいさを引き出して見せる。(243)

この「微妙なずれ」というのは〈視点によるものの見え方の違い〉と言い換えることができる。拾った赤旗を振るチャーリーの姿は、視点によって意味が変わり、彼は罪なくして拘置所へ送られてしまう。警官に手を掴まれてパトカーを待っているチャーリーは、タバコ屋の店主の視点からだと客に見えてしまう。そこにユーモアが存在している。先入観や思い込みで目の前のものをとらえるのではなく色々な可能性をチャップリンは映画の中で見せてくれる。それはまさに発した言葉によって、「政治的」あるいは「思想的」に分類されてしまう時代を生きたチャップリンだからこそ、表現できたユーモアである。チャーリーというキャラクターは沢山の作品の中で、時には兵士になり、質屋の番頭になり、時にはサーカスの団員になって色々な背景に登場する。しかし最後には、そこにはとどまらず、次の作品へと放浪を繰り返してきた。『モダン・タイムス』では最後に歌が大成功してカフェの給仕の職を得るのだが、結局、浮浪娘と一緒に逃げて二人で放浪することになる。このシーンで、チャーリーは、1930年代初頭の政治的映画批評家の圧力からも逃亡し、映画における彼の自由人としての存在を守ったのである。

注

＊画像1、2はRoy Export S.A.S.より使用許可をいただいて掲載しています。

1　『Modern Times モダン・タイムス』チャールズ・チャップリン メモリアル・エディション DVD 角川書店、2011年　日本語字幕　清水俊二　以下、映画の字幕はこのDVDによるものである。

2　チャールズ・チャップリン、中野好夫訳『チャップリン自伝』（新潮社、1966年）（以下『自伝』）。

3　Charles J. Maland, *Chaplin and American Culture : The Evolution of A Star Image*（Princeton University Press, 1989.）136－9頁。ここに二つの「左派（the Left）系」の映画批評が主流になってきた様子が書かれている。

4　Harry Alan Potamkin, “Film Cults”, *Modern Thinker and Author's Review*,（November, 1932）ページの表記なし。

5　Lorenzo Turrent Rozas, “Charlie Chaplin's Decline”, *Living Age*,（June, 1934）pp. 319－23.

6　Charlie Chaplin, Lisa Stein Haven ed. *A Comedian Sees the World*（University of Missouri Press, 2014）。1934年に吉田書店出版部から那須二郎訳で『チャーリー・チャップリン世界漫遊記』が出版されている。（以下『世界漫遊記』）

7　ウエストミンスター公とイノシシ狩りに行った時、狩り用の衣装を借りて着たところ、大きすぎて滑稽に見える様子が書かれている。この逸話は『ライムライト』（*Limelight*, 1952）の中でカルベロがノミの調教師役で着ている衣装を想起させる。またベルギー国王に会った時に、チャップリンに差し出された椅子がとても低くて居心地が悪く、話がうまく噛み合わなかった様子が記述されている。この逸話も『独裁者』の中でヒンケルとナパロニが対面する場面を想起させる。

8　『自伝』447－8頁。

9　ジョルジュ・サドゥール『チャップリン――その映画とその時代――増補版』（岩波書店、1982年）183頁。

引用文献

サドゥール、ジョルジュ著　鈴木力衛　清水馨訳（1982）『チャップリン――その映画とその時代――増補版』岩波書店

チャップリン、チャールズ著　中野好夫訳（1966）『チャップリン自伝』新潮社

Chaplin, Charles. Haven, Lisa Stein ed. (2014) *A Comedian Sees the World*, University of Missouri Press.

Maland, Charles J. (1989) *Chaplin and American Culture : The Evolution of A Star Image*, Princeton University Press.

【Abstract】

The Meaning of the Tramp Charlie's 'Exit' in *Modern Times*

Yuka IGARASHI*

Charles Chaplin's *Modern Times* (1936) is a work which marks a remarkable change of his film making style in a career of spanning 81 works. He made the tramp Charlie, the character that had gained popularity through his previous silent films, sing a song titled 'Titine' whose lyrics are composed of nonsense sounds and random languages. It was the first and only time for the audience to hear the tramp's voice, and yet it was also the last time that Chaplin performed the character in his films.

This paper examines *Modern Times* as a work created in the tense political climate of the early 1930s, when critics were keen to ascertain of Chaplin's political position by what he would say as he played the popular character, and argues that the tramp's 'Exit' from the screen may be seen as Chaplin's reaction to such a climate as an apolitical comedian.
Key words : Charles Chaplin, *Modern Times*, the tramp Charlie, silent films, the early 1930s

1936 年に製作された『モダン・タイムス』は、チャップリンの全映画 81 本において、作風の転換期を示す重要な作品である。サイレント映画で人気を誇ったチャップリン演じる放浪者チャーリーは、この映画で何の言語かわからない歌詞で「ティティナ」を歌い、初めてその声を披露する。ラストシーンではチャーリーとポーレット・ゴダード演じる放浪娘が二人で腕を組んで一本道を歩いていき、このシーンを最後にチャーリーはチャップリン映画から姿を消すのである。このチャーリー「退場」の背景には、1930 年代初頭に彼自身が身をもって経験していた緊迫した世界情勢と、そうした状況下において彼の政治的立場を解釈しようとする批評家たちの眼差しがあったと考えられる。

本稿では、『モダン・タイムス』をそのような時代に制作された作品として捉えることで、チャップリンがこの映画をもってチャーリーを「退場」させることになった意味について考察してみたい。
キーワード：チャールズ・チャップリン、『モダン・タイムス』、放浪者チャーリー、サイレント映画、1930 年代初頭

＊ A visiting research fellow of the Institute of Human Sciences at Toyo University